

# アクセント —三陸地方南部地域—

田中 宣廣

## 0 はじめに

当調査の対象とした三陸地方南部地域には、特徴的な2つの種類のアクセントの性質の地域が含まれている。これらは、東北地方の方言ではもちろんのこと、日本語全体のアクセントのなかでも、特徴的である。今回の研究は、これらの性質の現状を把握することを軸として進めることとなる。

## 1 三陸地方南部地域のアクセントの特徴

### 1.1 東北地方の方言のアクセントの分布

東北地方のアクセントは、平山(1957)、田中(2005)、その他より、以下のように整理される。

北奥羽方言地域(おおむね、岩手県中部より北側、青森県全域、秋田県全域、山形県の庄内地方と最上地方)と南奥羽方言地域の北半分(岩手県県南部、山形県村山・置賜の一部)が、言語体系内にアクセントが備わっている『有型アクセント』の地域である。

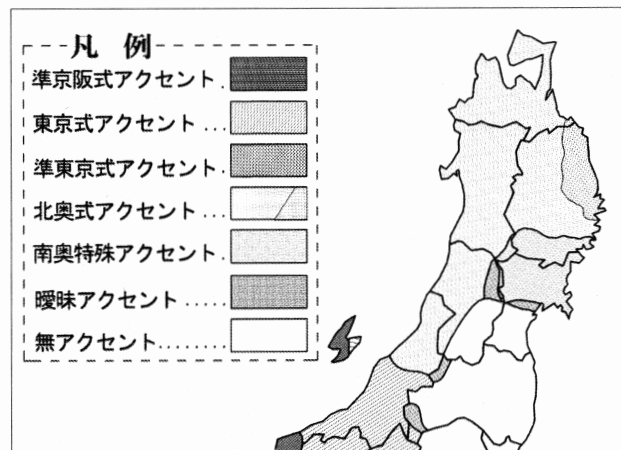
また、南奥羽方言地域の南半分(おおむね、宮城県南部、山形県村山と置賜の大部分、福島県の大部分)が、言語体系内にアクセントが備わっていない「無アクセント」の地域である。

有型アクセントと無アクセントとの接触地帯に「曖昧アクセント」が認められる。

さらに、北奥羽方言地域の太平洋沿岸部(八戸～大槌)には、1単語内に2箇所の高い部分の語例が認められる「重起伏調」の地帯がある。

以上を〔図1〕に示す。

〔図1〕東北地方アクセント分布図



### 1.2 東北地方のアクセントの性質

東北地方の有型アクセントの基本は「北奥式アクセント」で、これは「東京式アクセント」と大きく異なるアクセント構造である。「東京式」では語の中の声の下降の位置が固定されていて、この下降＝「さがりめ」が弁別的特徴のアクセント体系であるのに対し、「北奥式」は語の中の声の上昇の位置が固定されていて、この上昇＝「のぼり核」(のぼりアクセント核)が、アクセント節

内にあるか、ないか、あればどこにあるかによるアクセント体系である（田中 2005 他による）。また、「1.3①」の「南奥特殊アクセント」も同様に「のぼり核」による体系である。

### 1.3 当調査の地域のアクセント

「0」で述べた当調査地域のアクセントの性質のうち特徴的な2種類とは、以下のものである。

#### ①「南奥特殊アクセント」

語頭音節に「のぼり核」の位置する語例が、基本的に認められないアクセント体系で、岩手県の南部から宮城県の北部にかけての地域で認められる。平山(1957)では「東京式特殊音調Ⅱ」と呼称され、東北地方の方言のアクセントのなかでも、特徴的な性質を持つアクセントであることが知られている。「南奥特殊アクセント」の名称は田中(2005)他による。

#### ②「北奥式アクセント」の『太平洋沿岸重起伏調地帯』

「重起伏調」とは、実現音調において、アクセント節内に2カ所の高い部分が認められることで、その語例のあるアクセント体系である。重起伏調の認められるのは、「北奥式アクセント」のうち、青森県の八戸から岩手県の大槌にかけての太平洋沿岸地帯と、その近隣の地域（特に八戸から街道が直結している地点では、岩手県軽米町などの内陸側も含まれる）である。

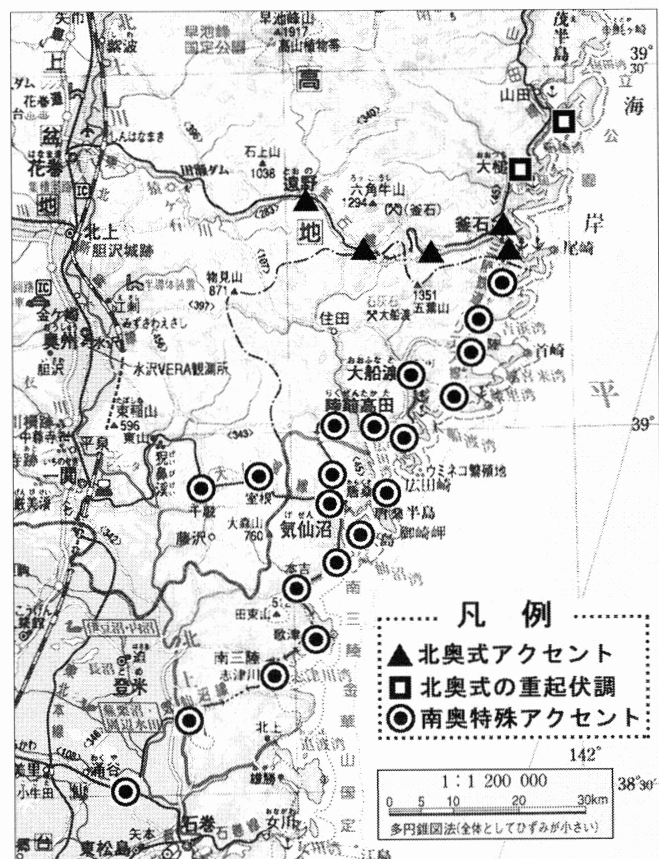
## 2 当調査の各地点のアクセント

〔図2〕三陸南部地域のアクセント分布  
（当調査の調査地点について）

当調査の地域には、「1.3」の2つの性質のアクセントのほか、「北奥式アクセント」の岩手県内陸部（遠野、足ヶ瀬、洞泉）と釜石地区（釜石、平田）が含まれている。

これら3種類について、平山（1957）、森下（1986）、また、真田（1972）（1966年から1971年の5次にわたる東北大学国語学研究室による調査の報告、以降これを「前調査」と呼ぶ）などの先行研究（「3」で説明）、および、筆者のこれまでの調査から、各地点のアクセント性質を整理し、地図上に表したものを〔図2〕に示す。

〔図2〕の地図原版には、帝国書院編集部編(2011)『新詳高等地図 一初訂版一』（帝国書院）を用いた。



### 3 先行研究

この地域のアクセントの研究には、日本全体が対象の研究の、平山(1940)(1957)があり、特に、平山(1957)において、この地域のアクセントの性質と日本語アクセントの中での所属が確定したと言ってよい。アクセントの構造については、その後の研究の進展により、「のぼり(アクセント)核」による体系であることが明らかになったが、以降のアクセント解説、例えば、『国語学辞典』や『国語学大辞典』も、所属については平山(1957)を原典としているし、平山(1957)収載の「奥羽方言音調分布図」こそ、現在なお、東北地方の方言のアクセントの考察の基本となっている。

そして、真田(1972)で報告された前調査である。1966年から1971年にかけて5次にわたり26地点について、東北大学国語学研究室の先生方や諸先輩の総力を挙げて、音韻、アクセント、文法、語彙の記述的研究を行い、そのうち16地点で実施したアクセント調査の考察を、佐藤・加藤(1972)のなかに収載した。これらの調査と並行して、南部藩と伊達藩の藩境付近の89地点で言語地理学的調査が行なわれたが、アクセントについては佐藤・加藤(1972)では未発表であった。

この真田(1972)は、当調査で課題とした北奥式アクセントと南奥特殊アクセントとの境界およびその付近、とりわけ宮城県側のアクセントの実態について、詳しく知ることができる数少ない公刊論考である。平山(1957)は、第二次世界大戦前に綿密な地点設定で調査した資料や原稿が、戦災により消失したための戦後の再調査による研究で、調査地点数は当初調査よりも減ぜられた。

その後、この地域のうち岩手県域について、森下(1986)で類別語彙の対応比較表の形式で整理された。さらに、東北地方全域のアクセントについて、森下(1996)で詳細な考察がなされた。

その他、方言研究のなかでは、本堂(1982)などで説明がなされている。

筆者も田中(2005)で、当調査の調査区域のアクセントについて関連内容に言及した。岩手県沿岸部の「重起伏調」について明確にし、「南奥特殊アクセント」の術語を用い、所属を確認した。

## 4 アクセント調査の内容

### 4.1 調査概要

アクセント調査は、宮城県気仙沼市を中心とする2005年からの3カ年の調査のうち、2007年の南三陸広域多地点調査のときに加えられた。他の多くの言語分野と合同の総合調査なので、項目は、「4.2」の目的に照らして、「4.3～4.4」のとおり、この地域のアクセントの特徴を確認する項目を少数選定した。この点、真田(1972)で報告された前調査においては、各地点での記述的研究として多数の項目を調査したのとは、異なる趣旨となった。

### 4.2 調査の目的

当調査のアクセント分野の目的は、「1.3」のとおりの特徴的なアクセントが認められる地域であることを鑑み、そのアクセント特色を検証するものとした。

調査票には、この目的を、各調査員への指示として、以下のように記載した。( )内は、該当する項目番号で、項目は「4.4」に示す。

**調査のねらい**

論点1：北奥式アクセントか、南奥特殊アクセントか (1~9, 14・15)

＝南奥特殊アクセントは、第1音節にのぼり核の語のない体系だが、その現状や北奥式との境界を見出す。

論点2：北奥式地域における、内陸低平調地域か、太平洋沿岸重起伏調地帯か (10~13)

＝北奥式アクセントの無核語は、内陸は低平調、太平洋沿岸部は重起伏調だが、その現状や境界を見出す。

**4.3 調査項目の選定**

「4.1~4.2」より、調査項目(調査語彙)は、「論点1」の(「南奥特殊アクセント」関連)のものと、「論点2」(重起伏調の関連)のものとの2種のみとし、項目数も少数とした。この調査項目により、2論点以外の、「北奥式アクセント」の内陸側の地域におけるアクセントについても、前調査からの変化の現状を見るという目的を果たすことも可能だと判断した。

調査においては、全調査項目を、全調査地点で調査した。つまり、たとえば「南奥特殊アクセント」地域の地点であっても、「論点1」のために選定した項目だけを調査したのではなく、他の項目も含めた、用意した全語彙を調査したわけである。

**4.4 調査項目と各項の目的**

「4.3」により選定した調査項目と、主に確認する目的は以下のとおりである。

[表記注] ●, ▼: 高音節 / ○, ▽: 低音節 /

◎: 高まった音節から漸降する(少しずつ音が低くなってゆく)途中の音節

●, ○: 名詞部分 / ▼, ▽: 助詞「ーも」

論点1：南奥特殊アクセントに関して：1~9, 14, 15；( )内が確認する目的

- 1 鯨 (○●○か, ●○○また●◎○か)
- 2 雀 (○●○か, ●○○また●◎○か)
- 3 烏 (○●○か, ●○○また●◎○か)
- 4 啄木 (○●○○か, ●○○○また●◎◎○か)
- 5 松茸 (○●○○か, ●○○○また●◎◎○か, ○○○○か)
- 6 針 (○●か, ●○か)
- 7 跡 (○●か, ●○か)
- 8 猿 (○●か, ●○か)
- 9 陰 (○●か, ●○か)
- 14 山田 (○●○か, ○○○か, ●○○また●◎○か) ※
- 15 大槌 (○●○か, ○○○か, ●○○また●◎○か) ※

※「14 山田」と「15 大槌」は岩手県内の地名で、北奥式の地域では、●○○（内陸部）また●◎○（沿岸重起伏調地帯）の音調で実現するので、この目的に有効と考え加えた。

===

論点2：北奥式地域における、内陸低平調地域か、太平洋沿岸重起伏調地帯か：10～13

- 10 魚 (○○○か, ●○●か)  
11 車 (○○○か, ●○●か)  
12 水も～ (○○▽か, ●○▼か)  
13 寺も～ (○○▽か, ●○▼か)

#### 4.5 調査方法

調査方法は、共通語による調査例文を話者に見せて、これを、話者に、その地点の方言に翻訳しつつ発音していただく方式である。話者に発音させるだけでなく、調査者が復唱して話者の確認を得る、という言語調査の基本に忠実なことも心掛けた。調査票にも以下の注意書きを示した。

##### 調査の注意

- ①調査例文を話者に見せて口上を述べつつ、当該方言に反省的に翻訳して発音していただく方式で行う。
- ②話者の発音については、調査者が必ず復唱的发音をして話者の確認を得ることを励行する。
- ③票中の第1基本節部のカタカナは調査時に、話者の回答音声に合わせて修正し、第2基本節部の.....には回答形式を記録しつつ、全文にわたって反省的実現音調を、「線」により記録する。なお、カタカナの斜体（グなど）はカ行音濁音化が、ひらがなは鼻濁音が、それぞれ予想される音だが、必要があれば調査時に修正する。

また、説明文の①にある「口上」とは以下のもので、話者にも、このアクセント調査の趣旨が伝わるように努力したものである。

以下の文を、普段気をつかわないでしゃべるときのことばに直して発音して聞かせてください。決して、文字を読み上げるのではありません。但し、発音を教えていただく簡単な文なので、結果として文字と同じことばになってもかまいません。

話者に見せる例文は、以下のように、大きな文字で、漢字にはふりがなを付けて示した。

- |   |           |                   |
|---|-----------|-------------------|
| 1 | くじら<br>鯨。 | くじら く<br>鯨も食いたいよ。 |
| 2 | すずめ<br>雀。 | すずめ と<br>雀も飛んでたよ。 |

## 5 調査結果と考察

### 5.1 南奥特殊アクセント地域での現状

南奥特殊アクセントに関連する項目の調査結果を〈表1〉に示す。

この表は、□と▲の北奥式アクセントの地域では語頭に高音節のある語例で、・の南奥特殊アクセントの地点での実態を示したもので、当調査の目的に叶うように、地点を北から順に並べてある。洞泉と唐丹で地名が2つあるのは2名の話者を調査したからである。「アクセント所属」は、〔図2〕の分布図と同じ記号(□, ▲, ・)により、アクセント所属を示したものである。調査結果は、符号化せずに、音節ごとにそのまま示した。そのなかで、「松茸」は、[マツタケ]もしくは[マズダケ]の実現なら4音節だが、足ヶ瀬、釜石、大谷、志津川では[マツタケ]なので3音節である。

〈表1〉三陸南部地域高年層アクセント調査結果1

地点名	アクセント所属	鯨	雀	烏	啄木	松茸	針	跡	猿	陰
船越	□	●◎○	●◎○	●◎○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
大槌	□	●◎○	●◎○	●◎○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
遠野	▲	●○○	●○○	○●○	●○○○	●○○○	●○	○●	●○	○●
足ヶ瀬	▲	●○○	●○○	●○○	●○○○	●○○○	●○	○●	●○	○●
洞泉	▲	●◎○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
洞泉	▲	●◎○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
釜石	▲	●○○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎○	●○	○●	●○	●○
平田	▲	●○○	○●○	○●○	○○○○	●○○○	●○	○●	●○	●○
唐丹	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	●○
唐丹	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	●○
吉浜	◎	●◎○	○●○	●◎○	●◎◎○	○●○○	○●	○●	●○	○●
越喜来	◎	○○○	●◎○	●○○	●◎◎○	○●○○	○●	○●	○●	○●
綾里	◎	●◎○	○●○	●◎○	○○●○	○●○○	●○	○●	○●	○●
大船渡	◎	●◎○	●◎○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
小友	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
陸前高田	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
鹿折	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
唐桑	◎	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
千厩	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
折壁	◎	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
気仙沼	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
大島	◎	○●○	○●○	●○○	●○○○	●○○○	○●	○●	○●	○●
大谷	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	●○○	●○	○●	○●	●○
本吉	◎	○●○	○●○	○●○	○○○○	○○○○	○●	○●	○●	○○
歌津	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
志津川	◎	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○	○●	○●	○●	○●
柳津	◎	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	●○	○●
前谷地	◎	●○○	○○○	●○○	●○○○	○○●○	●○	○●	○●	○●

実態は、少数の例外はあるものの、高年層では現在も南奥特殊アクセントの性質が保たれている。北奥式アクセントの地域に隣接している岩手県の唐丹、吉浜、越喜来、大船渡の諸地点では、語頭が高い語例も認められるので、北奥式アクセントと南奥特殊アクセントとの境界は、平山(1957)他の先行研究で示された平田・唐丹間から南側の、当調査では大船渡・小友(陸前高田市)間のようなものである。ただし、唐丹から語頭が高い語例が少なくなることも分かる(稿末に参考写真)。

なお、岩手県内陸部の遠野、足ヶ瀬、洞泉で「跡」（遠野と足ヶ瀬では「陰」も）は〔○●〕だが、これは、2音節名詞第IV類と第V類で、末尾音節の母音の広狭によるアクセントの違いによる結果と見るのが適切であろう。

## 5.2 重起伏調地帯での実態

岩手県太平洋沿岸部の北奥式アクセントの重起伏調地帯に関連する項目の調査結果を〈表2〉に示す。地点名や「アク所属」に関しては〈表1〉と同じである。

〈表2〉は、□の北奥式の地域で重起伏調になっている語例で、その他の地点での実態を示したものである。

まず、先行研究では北奥式アクセントの内陸部の所属となっている釜石で重起伏調を示しているのが分かる。

「寺」は、「オデラ」の語形で、実現音調は〔●○●〕であり、これを加えると、重起伏調関連の4つの調査項目すべてで重起伏調となっている。詳しい調査による検証の必要を認めるところである〔注1〕。

その他では、低平調の〔○○○〕の地点が多く、地域差が明確である。

〈表2〉 三陸南部地域高年層アクセント調査結果2

地点名	アク所属	魚	車	水も	寺も
船越	□	●○●	●○●	●○▼	●○▼
大槌	□	●○●	●○●	●○▼	●○▼
遠野	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
足ヶ瀬	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
洞泉	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
洞泉	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
釜石	▲	●○●	●○●	●○▼	オデラ
平田	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
唐丹	◎	○○○	○○○	○●▼	○●▼
唐丹	◎	○●○	○○○	○○▼	○●▼
吉浜	◎	○●○	○○○	○○▼	○●▼
越喜来	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
綾里	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
大船渡	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
小友	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
陸前高田	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
鹿折	◎	○○○	○○○	○○▼	○●▼
唐桑	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
千厩	◎	○●○	○○○	○○▼	○○▼
折壁	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
気仙沼	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
大島	◎	○○○	○○○	○○▼	○●▼
大谷	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
本吉	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
歌津	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
志津川	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
柳津	◎	○○○	○●○	○○▼	○○▼
前谷地	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼

## 5.3 年層差の実態

2007年の調査では、宮城県内の地点を中心に、高年層の話者と併せて青年層の話者からも聴き取りをすることができた。

アクセントで言えば、これらの地点はいずれも、南奥特殊アクセントの地域であり、この観点からアクセントの年層差を見ることができる。

青年層のアクセントの調査結果を〈表3〉（次ページ）に示す。地点ごとに、高年層と並行させて示した。南奥特殊アクセントの観点から、つまり、高年層で語頭音節が高くなかった語例が、青年層では語頭音節が高くなった変化を、地点ごとに高年層との比較でみる。

大船渡：「猿，陰」，陸前高田：「針」，唐桑：「松茸，針，跡，猿，陰」，内陸部の千厩：「鳥，針，跡，猿」，同じく内陸の折壁：「針，跡，猿」，気仙沼：「鳥，針，跡，猿，陰」，大谷：「鳥，

啄木」，本吉：「陰」，歌津：「針，跡，陰」，志津川：「針，猿」で，この変化を認める。

筆者が実際に調査した本吉では，30歳代始めの話者であったが，調査項目以外でも，南奥特殊アクセントの性質が依然として保たれているとの強い印象を得た。これも，詳しい調査による検証の必要を認めるところである。

ところで，「5.1」と「5.2」の高年層では，北奥式との関連を考慮して考察するのが基本であったが，青年層の場合，『共通語化』の問題も考慮する必要がある，上述の変化の理由については，すぐには判断できない。ただ，語頭音節が高くなった語例のあった10地点でも，他の語例では，共通語化，つまり，東京方言のアクセントへの変化と思われる実現例はほとんど認められない。

〈表3〉三陸南部地域青年層アクセント調査結果

地点名	年層	鯨	雀	烏	啄木	松茸	針	跡	猿	陰
大船渡	高	●◎○	●◎○	○●○	○●○○	○●○○	○●	●○	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	●○	●○	●○
陸前高田	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	○●	○●
鹿折	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
唐桑	高	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○○○	●○○	○●○○	●○○○	●○	●○	●○	●○
千厩	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	●○	●○	●○	○●
折壁	高	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○●○	●○○	○●○○	○●○	●○	●○	●○	●○
気仙沼	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○○○	●○○	○●○○	○●○○	●○	●○	●○	●○
大谷	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	●○○	●○	○●	○●	●○
	青	○○○	○○○	●○○	●○○○	○●○○	●○	○●	○●	●○
本吉	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○	○●	○●	○●	●○
歌津	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	●○	○●	●○
志津川	高	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	○●
柳津	高	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	●○	○●
	青	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	●○	○●

#### 5.4 地名のアクセント—南奥特殊アクセントの調査の一部として—

南奥特殊アクセントの調査の一部として，北奥式アクセントの地点ならば，語頭音節が高くなる語例として，地名を2例，調査に加えた。いずれも岩手県沿岸部の地名で，「山田（やまだ）」と「大槌（おおつち）」である。両例とも現地また宮古市など周辺地域では〔●◎○〕と実現する。

高年層の調査結果を〈表4〉に示す。なお，「大槌」は，[オーツチ]のほか，[オーズジ]また[オーズズ]の実現なので，3音節となる〔注2〕。

〈表4〉から，は，「5.1」の一般語彙とは別の結果を認めた。まず，最上行の船越は「山田」町内の1地区であり，これと第2行の「大槌」は，各々自体の地名は，現地発音ということになる。

表は，釜石から大船渡までと，小友から柳津までとに分けて見ることができる。



釜石～大船渡では、「山田」に語頭が高い〔●○○〕は、足ヶ瀬と吉浜（〔●◎○〕）の2地点で、その他は、〔○●○〕の実現音調が多い。これは、現地発音に対して南奥特殊アクセントの『語頭の高音節を避ける』性質が幾分かでも働いているものと思われる。

釜石～大船渡の「大槌」は、現地に近い釜石、足ヶ瀬、洞泉では、現地発音と同じ〔●○○〕だが、唐丹以南は、語頭に高音節のない実現音調となっていて、南奥特殊アクセントの性質の影響と思われる。

以上の釜石～大船渡に対し、小友以南の各地点では、「山田」に〔○○○〕の実現音調が多い。これは、南奥特殊アクセントの性質というより、なじみのない地名であるためであると思われる。

同じく小友以南の各地点における「大槌」は、多くの地点で〔●○○〕が多いが、これは、南奥特殊アクセントの性質からすると例外となる。南奥特殊アクセントで例外の語頭音節が高く実現する例のうち、“普段あまり使用しない語”がある。これらの地点では「大槌」は、なじみのない土地であると考え、この実現音調となったことが理解できる。

つまり、「山田」と「大槌」の二つの土地に、なじみのある釜石～大船渡の各地点では、現地発音に対する各々の地域のアクセントの性質の影響が現れるのに対し、二つの土地から距離があり、なじみのあまりない小友以南では、現地発音と関連のない〔○○○〕や、語例自体がアクセント体系の例外とされて〔●○○〕も実現したものと思われる〔注3〕。

〈表4〉地名のアクセント（高年層）

地点名	アク所属	山田	大槌
船越	□	●◎○	●◎○
大槌	□	●◎○	●◎○
遠野	▲	○●○	○●○
足ヶ瀬	▲	○○●	○●○
洞泉	▲	○●○	●○○
洞泉	▲	○●○	●○○
釜石	▲	○●○	●○○
平田	▲	○○○	○●○
唐丹	◎	○●○	○●○
唐丹	◎	○●○	○●○
吉浜	◎	●◎○	○●○
越喜来	◎	○●○	○○○
綾里	◎	○●○	○●○
大船渡	◎	○●○	○○○
小友	◎	○○○	●○○
陸前高田	◎	○○○	●○○
鹿折	◎	○○○	●○○
唐桑	◎	○○○	●○○
千厩	◎	○○●	●○○
折壁	◎	○○○	●○○
気仙沼	◎	○●○	●○○
大島	◎	○○○	○○○
大谷	◎	●○○	●○○
本吉	◎	●○○	○○○
歌津	◎	○○○	●○○
志津川	◎	○●○	●○○
柳津	◎	○○○	○○○
前谷地	◎	○○○	○○○

## 6 まとめ

以上、三陸南部地域のアクセントの現状を概観した。

当調査の調査では、論点を2点に絞り、この2点について検証するのを目的とした。この目的は、おおむね達成されたと思われる。

つまり、「0」で述べたように、東北地方のみならず日本語全体のアクセントのなかで特徴的な性質のアクセントが、当調査の調査地域の主要なアクセント性質であり、これについては、現在もその性質をほぼ保っている。また、各地点のアクセントの全体像を見ることはできなかったが、全

体像を推定し、今後、各地点ごとに詳しく調査するときの指針になり得ると考える。

1966年から1971年の前調査では、東北地方の方言のアクセントが研究途上であったところ、非常に貴重な資料を残した。この地域のアクセント性質からの論点による調査や分析ではないが、かえってそれが功を奏し、当調査では難しかった全体像が理解できる研究になっている。

当稿の「5.1」でも触れた、「跡」＝[○●]などの実現結果は、岩手県内陸部における北奥式アクセントの2音節名詞第Ⅳ類と第Ⅴ類の末尾音節の母音の広狭によるアクセントの違いからの結果と、南奥特殊アクセントによるものなのかは、現在のこの地域のアクセントに関する研究と照合して、地点により理解することになる。

## 7 おわりに

当調査の各地点の地名は、ほぼそのまま平成23年(2011)3月11日(金曜日)午後2時46分に発生した「東日本大震災」の津波被災地の地名となっている。これから先、この地域で、当調査の規模の方言調査が可能になるには、長い年月が掛かるであろう。それよりも、当調査の方言調査と同じ土地への帰還自体が困難な地区がいくつもある。住民は新たな土地での生活となり、方言の使われる土地が移動する。これを考えると、当調査と同じ質の資料を得ることは、難しくなっていて、当調査の結果や前調査の資料は、再採取困難なとても貴重な記録となった。

筆者は、津波被災地の岩手県宮古市で生活している。宮古市でも、死者・行方不明者約800人、市役所を含め全半壊建造物約5,000棟など甚大な被害を受けた。筆者の住居地の地区体育館が市の遺体安置所となり、私宅前の公園も仮設住宅となっている。脱稿時は東日本大震災から約1年後となったが、この間、時が進んでいない感じが、私にはあるなか、3年前から顧問をしているボランティアサークルの学生たちとともに、地域の皆さんと支え合いながら研究活動をしてきた。

そのなかで、中心地が壊滅してしまった各地点の地名に接しながら資料を見てゆくのは執筆者として気持ちが重くなることもあったが、前述のとおり、非常に貴重な資料なので、研究報告としてしっかりまとめる責務があり、その責任の重さを支えにして執筆してきた。

また、当調査の話者の方のなかでお三方の犠牲者が確認されたそうである。当調査の資料は、上で述べた資料の学術的貴重性のほか、お三方の犠牲者の残しておくべき遺言だとの思いもある。それら一言ずつを確かにまとめ上げることも大切な役目と考え、折れそうな気持ちの支えとした。

私の調査話者にも、陸前高田市の方が犠牲になってしまった。岩手県警察の犠牲者名簿で分かった。お宅は高田松原の近くであった。7万本の松がたった1本を残してなぎ倒されてしまったところである。一般個人家屋はひとたまりもなかったであろう。調査のときの話者の方との記念写真を見ながら、悔しさが募るばかりである。

もしこの報告がご親族方のお目に止まったなら、お伝えしたいことがある。当調査のときの記念写真が私の手元にある。せめてものお慰めになれば、お渡ししたい。

## 注

- 1 釜石の話者は、調査時は釜石市中心部（浜町）にお住まいであった（情報では現在は仮設住宅にお住まい）が、言語形成期の前半は、北側の大槌町と隣接してやや内陸側の栗橋地区でお過ごしであった。養育者は、母親が栗橋地区ご出身（父親は旧三陸町ご出身）であり、影響があるのかもしれない。
- 2 **【オーズジ】**（**太字**+**囲み**が高く発音される部分）などと、第1音節【オー】の部分が高い場合は、**【●○○】**と表記し、第2音節が高い【オー**ズ**ジ】は**【○●○】**と表記する。
- 3 実際、これらの地点では、青年層も含めて、「なじみがない」からアクセントも確実なところはよく分からない旨を、調査時に発言している話者も複数認められた。

（参考写真）東北地方太平洋沿岸部の方言の区域を南北に分かつ<sup>へいた</sup>平田—<sup>とうに</sup>唐丹間の<sup>くわだとうげ</sup>鍬台峠—三陸鉄道南リアス線平田駅より南方向を望む＝画面中ほど鍬台トンネルの先、約5.4kmが唐丹地区—



## 文 献

- 佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』8・9：pp. 116-166
- 真田信治（1972）「第二章 アクセント」佐藤・加藤（1972）pp. 131-142
- 田中宣廣（2005）『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』育英書院
- （1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 本堂 寛（1982）「岩手県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学4「北海道・東北地方の方言」』国書刊行会 pp. 237-269
- 森下喜一（1996）『東北地方方言アクセントの研究』おうふう
- 森下喜一編・平山輝男監修（1986）『岩手方言アクセント辞典』第一書房